

鶴見日本文學會報

第87・88号

令和3年3月1日
鶴見大学日本文学会
鶴見区鶴見2-1-3

活用形のなまえ

—已然形—

遠藤 佳那子

動植物の名称に名付け親や由来があるよう、言葉にまつわる術語にも名付け親や由来がある。現行の学校文法で用いられてゐる術語、たとえば用言の活用形「未然」「運用」「終止」「連体」「已然」「命令」、これらも各々に命名の由来がある。

日本語において初めて体系的に文法や品詞を整理し、また活用表と呼べるもの提示したのは富士谷成章（一七三八—一七七九）という人物である。だが学校文法の直接の基礎となつてゐるのは、こと用言研究に関しては、本居春庭（一七六三—一八二八）の学説である。春庭は古典日本語の用言の語尾変化を、命令形を除く五種の形式（未然形、連用形、終止形、連体形、已然形）に整理した（『詞八衢』文化五年／一八〇八）。しかし彼はそれらに固有の名称を与えたかった。そのため後の学者たちの中には、春庭の学説を継承しつつ独自に術語を創案する者もおり、近世後期

から明治期にわたつて多種多様な術語が世に生み出された。たとえば終止形の場合、「截断言」「断止段」「絶定言」など、「止まる」「切れる」を意味する用語が統一されることなく用いられていた。現行の「終止」という名称は、明治期になつてからようやく登場する真新しいものである。

現在の学校文法にある六活用形の中でも最も古參であり、多くの学者に用いられてきた術語は「已然」である。現代の古典文法書には、「已然」（すでにそなつている）形」と説かれる。²⁾

この術語の初出は義門（一七八六—一八四三）の『友鏡』（文政六年／一八二三）である。義門は本居宣長・本居春庭の学説を継承し、敷衍した人物である。この術語は『活語指南』（天保十五年／一八四四）に次のように解説される。

然あつてすんだ処なり。専然未然に

対し考ふべし。已はちやんとすんだの

なり。花開けばと云を花開かばと云に對して考ふべし。咲かばは未也。咲けばはちやんと也。

『活語指南』上巻一丁裏³⁾
接続助詞「ば」を伴う形式「咲かば（もし咲いたならば）」と「咲けば（咲いたので）」を例に挙げて対比し、後者を「ちやんとすんだ」、すなわちすでに実現し終えたことを表現する形式であることからこのように名付けたという。これは、現代で言うところの順接確定条件の用法に基づく命である。

また義門は命名の背景を次のように明かしている。

已然言は本居の言遣に常々已然るを顯す言と云てある。其已然ると云を漢字に書いて名目にしたが已然言也。

（『和語說略圖聞書』二〇五五頁⁴⁾

ここで登場する「本居」とは、本居宣長のことを指す。たとえば本居宣長『詞玉緒』（天明五年／一七八五）には次のように記述が見える。

○濁るばに。既に然る事をいふと。未然ラ事をかねていふとの二つあり。既に然る事をいふは。『花さけば』花れば。『月出れば』月いればなどのごとし。

（『語法指南』三七頁⁵⁾

ある用法に基づいた命名は「わかりやすさ」がある。だが、ひとつの形式に複数の用法が認められる場合には、すべての用法を命名に活かすことは出来ず、いずれかの用法との間に齟齬を生じさせることになる。已然形の場合は「こそ」の結びとしての用法との間に齟齬が生じた。この問題を回避するため、大槻文彦は各活用形に意義のある名称を用いず「第一変化」「第二変化」などと称している。春庭が固有の術語を定めなかつたのも、このためであつたのかも知れない。

さて、「已然」と対をなして名付けられたのは「未然」である。右の『詞玉緒』に

という用法がある。国内の古典語研究においては、已然形はむしろ「こそ」の結びに現れる形式として注目されてきた。本居宣長もまた、今で言う終止形・連体形・已然形を係り結びの法則を体系づけた結果として列挙している。右の『詞玉緒』の記述も、已然形ではなく接続助詞「ば」についての解説であることに注意せねばならない。本居春庭も已然形を「こそ」の結辞⁶⁾と説く。この用法を前提とする、義門が定めた「已然」という名称はまったく関係のない名付けとなってしまう。

この問題は、大槻文彦『語法指南』（明治三年／一八八九）で指摘されている。已然は、過ぎたれる意をいふと釈きて、又、その「掛り」をば、現在の意にて結ぶことともなる、齟齬極まらない名付けとなつてしまふ。

すでに「未然」の字面が見えるが、義門は「未然」を採用しなかつたため「已然」からやや遅れて登場することになる。これについてには稿を改めたい。

〔注〕

1 「截断言」は義門、「断止段」は富樫広蔭、「絶定言」は鈴木重胤による用語。

2 月本雅幸監修（一九七〇）『これでわかる

明快古典文法（改訂版）』いいずな書店、浜本純逸監修（一九七三）『読解をたいせつに

する体系古典文法（八訂版）』数研出版。

3 義門著 岡崎正継解説（一九七六）『活語指南』勉誠社。引用に際して片仮名表記を平仮名に改めた。

4 三木幸信編（一九六七）『義門研究資料集成』中巻 風間書房。引用に際して片仮名表記を平仮名に改め、私に濁点を補った。

5 大野晋編（一九七〇）『本居宣長全集』第五卷 筑摩書房。

6 大槻文彦著 北原保雄・古田東朔編（一九九六）『語法指南』勉誠社。